

短期海外留学プログラムの評価と長期留学希望の関連性 — 東京外国語大学のショートビジットを事例として —

新居純子・岡田昭人

はじめに

平成 23 年、平成 24 年度に、文部科学省は「留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット）」を導入した。本制度は、日本の大学、大学院、短期大学、高等専門学校第 4 年次以上、専修学校を対象とした、3 か月未満の留学生受け入れ、ならびに海外派遣プログラムに参加する日本人学生のための奨学金制度である。

東京外国語大学短期海外留学プログラム（ショートビジット、以降 TUFSS-SV とする）は、この支援制度の開始とともに整備された。文部科学省のショートステイ・ショートステイは平成 25 年度に廃止され、「海外留学支援制度（協定派遣・受入）」に統合される形で継続され、現在に至っている。この制度は、短期派遣 短期研究・研修型とされ、8 日以上 1 年以内の期間で、学生を派遣・受け入れる制度である。

本論文は、東京外国語大学が TUFSS-SV の留学後教育の一環として記入を課している留学体験報告書の内容から、プログラム内容の評価とその後の長期留学の希望状況に相関があるかどうかの考察を行うものである。その上で、本稿は留学プログラムの質をどう保証するか、また将来的に短期海外留学をいかに長期留学につなげられるかを分析・示唆するものである。

1. 留学の効果について

留学の効果については、広範に研究されているところではあるが、近年行われた大規模な研究としては、横田(2015)による「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する調査」が挙げられる。本調査では、留学経験や留学で得た能力が、その後の進路や人生にどのような影響を及ぼしているかを明らかにしたものである。横田他によると、留学が語学力向上のみならず、その後の前向きな価値観の醸成など内的な効果もあることや、キャリアへの効果などについても述べられている(横田、2015)。また、池田(2011)は、海外留学の意義とメリットについて、学生へのインタビューを基に考察を行っており、ここでも言語能力だけではなく、それ以外の力、例えば主体性や実行力といった点にもプラスの影響が表れていると論じている。

日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度では、奨学金受給者を対象に毎年留学についてのアンケートを行っており、調査結果がまとめられている。留学のキャリアへの影響など、様々な効果について言及されており、その中で、短期留学者が長期留学への意欲を示していることが示されている野水、新田(2014)によると、2011 年、

2012年の同アンケート結果から、ショートビジット対象者の約50%が、ショートビジット留学後により長期の留学がしたいと回答している。しかし、ショートビジット留学の中の、具体的にどの部分や経験が長期留学への意欲につながっているかについては、結果の中に含まれていない。本論文では、短期留学と長期留学との関連についてさらに細分化して考え、東京外国語大学でTUFSS-SVに参加した学生の留学体験報告書の中から、短期留学の内容のうち、特に留学先のプログラム内容の評価との関連性について考察を行う。

2. 東京外国語大学の留学制度

東京外国語大学では、4学期制における1学期間以上の期間の留学を「長期海外留学」として定義し、夏学期・冬学期に行う留学や、学期中に大学が行うプログラムによる留学を「短期海外留学」と定義している（東京外国語大学、2016）。長期海外留学には、交換留学、休学留学、自由留学、長期インターンシップの4つの種類があり、それぞれの内容は以下のとおりである。

1. 交換留学：本学協定校との学生交換の枠組みで、本学から派遣される形の留学。
2. 休学留学：休学をして留学する学生のうち、単位認定の申請を行っている学生の留学。
3. 自由留学：休学をして留学する学生のうち、単位認定の申請を行わずに海外の教育機関に留学をする学生の留学。
4. 長期インターンシップ：休学をして海外に在住する学生のうち、その目的がインターンシップである場合。

一方、「短期海外留学」には以下のとおり4つの種類がある。

1. ショートビジット (TUFSS-SV)：夏学期・冬学期に、本学指定の海外の協定校が行っているプログラムに参加する。
2. スタディツアー：協定大学との共同教育や海外での学修体験の獲得を目的に、本学や他の公的機関が実施するプログラムに参加するもの。
3. 短期インターンシップ：本学のグローバルキャリアセンターが実施する海外での短期インターンシップに参加するもの。
4. 日本語教育インターンシップ：日本語教育を学ぶ本学学生が、海外で行うインターンシップ。

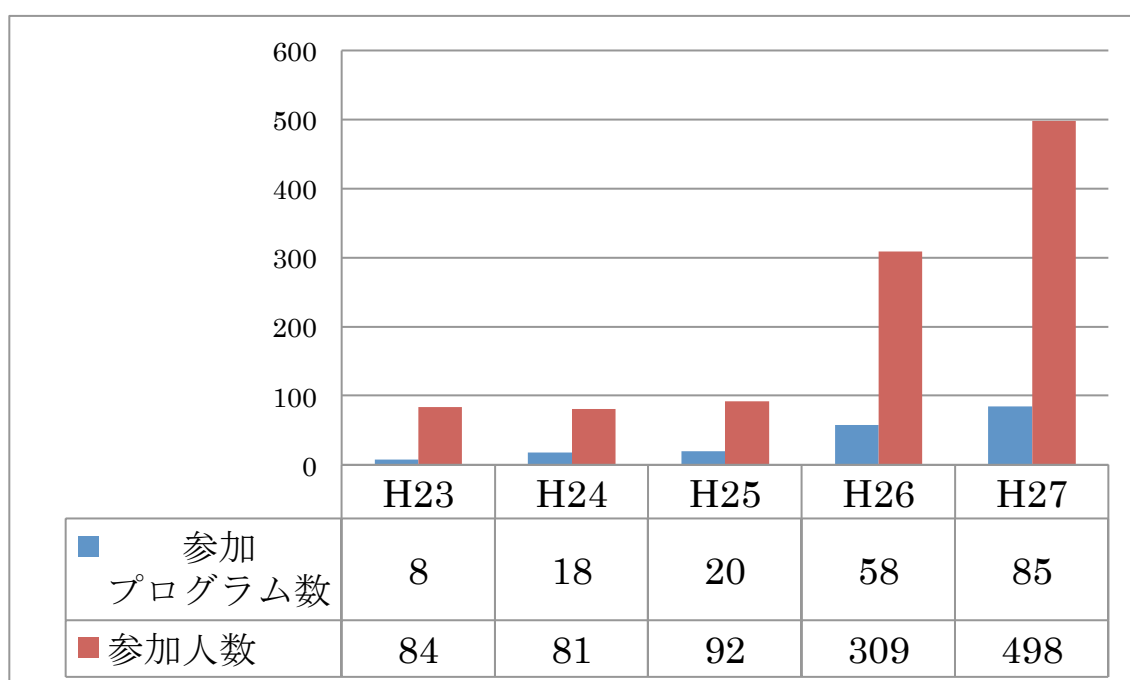
本論文では、上記の短期海外留学制度のうち、「ショートビジット (TUFSS-SV)」に参加した学生が記入する留学体験報告書の内容から考察を行っていく。

3. 東京外国語大学 ショートビジット制度 (TUFSS-SV)

夏学期と冬学期に、2週間から2か月間、本学の協定校で行われる夏、冬の2週間から2か月の短期コースを、各協定校担当教員の確認を経て「短期海外留学」科目として開設している。プログラムは、各国言語コース(英語以外の各国言語を学ぶ)、英

語コース(英語を学ぶ)、英語で学ぶ総合型コース(英語であらゆるテーマについて学ぶ)の3つに分け、学生は希望するプログラムに参加する。学生は、希望する大学の科目(短期海外留学)を履修登録し、留学前教育、留学後教育を併せて行い、留学後には2単位を付与する。TUFSSVの制度は、平成23年度に開始され、6年が経過している。平成27年度には、参加実績のあるプログラム数が当初の10倍以上である85になり、参加者数も84名から約6倍の498名となっている。平成29年度夏には、103以上のプログラムが短期海外留学先となっている。

図1 平成23年度から平成27年度 TUFSSV参加プログラム数と参加人数の推移



4. 留学前・留学後教育

TUFSSVに参加をする学生は、留学前・留学後教育を受けることが義務付けられている。留学前教育には、CEFR⁽¹⁾のディスクリプターに回答することで、留学先で学ぶ(使用する)言語能力の自己評価を行うもの、危機管理に関する映像教材を見て設問に回答するものが含まれる。また、留学後教育としては、前述のCEFR診断を行うことにより、自己評価での言語能力がどの程度伸びたかを確認することに加え、

(1) CEFRとは、欧州評議会(Council of Europe)により2001年に公開された、Common European Framework of Reference for Languages(ヨーロッパ言語共通参照枠)の略。聞く、話す、読む、書くという語学のコミュニケーション能力別のレベルを示す国際標準規格として、広く導入されつつある。「具体的に何ができるか」を示した枠組みで、ABC段階をさらに2分割した、6段階のレベルとなっている。

留学体験報告書に回答することが課せられる。これらの教育プログラムの取り組み状況は、成績に反映される。このことにより、学生の回答に関する信頼性が上がるのではないかと考えられる。

5. 調査の概要

使用するデータは、TUFUS-SV 留学をした学生全員が、自己の留学の振り返りと今後留学をする学生の参考資料となることを目的に記入する、「ショートビジット留学体験報告書」である (<https://mdle.tufs.ac.jp/exchangeReport/visit>)。

2013 年度より報告書への記入を義務付けており、2016 年 12 月現在では、1041 件の報告書が掲載されている。本調査では、2016 年夏に TUFUS-SV 留学を行った 291 名のうち、実際に報告書を提出した 274 名 (94.1%) の体験報告書のデータを使用し、考察を行う。本調査では、体験報告書の設問のうち、5 段階で表す「参加したプログラムの授業内容と感想」の評と、「今後 1 学期から 1 年の長期の留学をしたいか」の設問に対する答えに、相関があるかどうかを見るのが本調査の目的である。本調査におけるデータの概要は、以下のとおり。

図 2 男女別 TUFUS-SV 参加者数

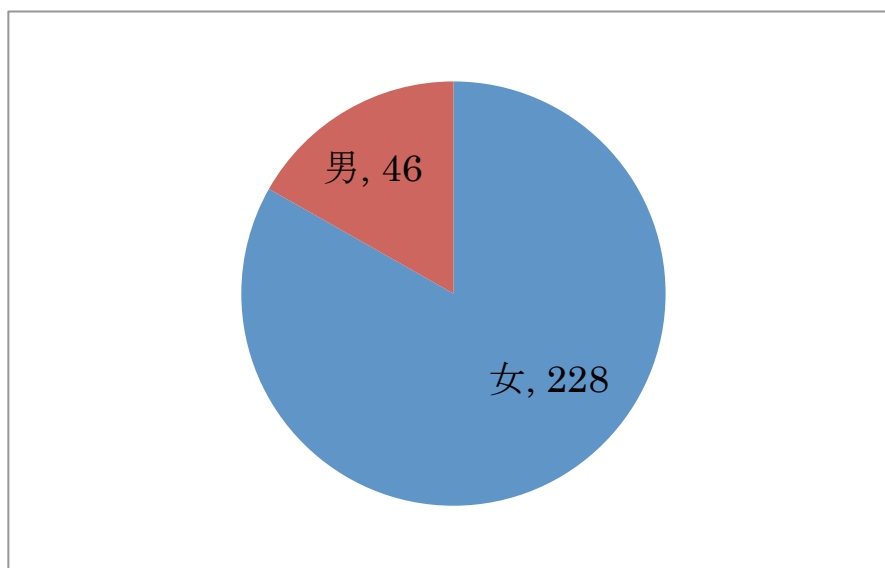
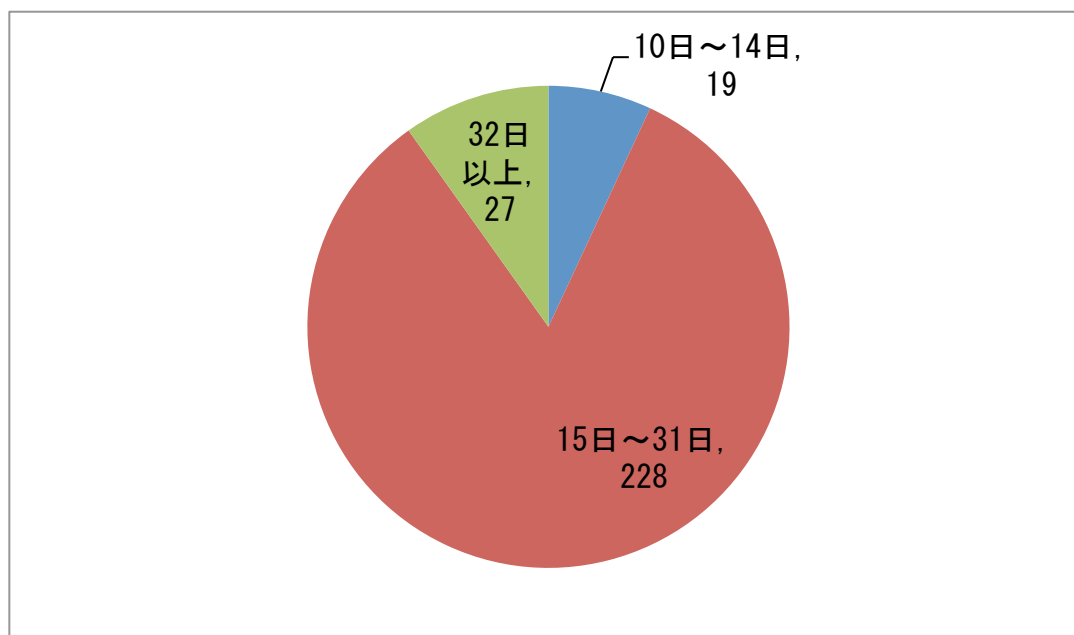


図3 期間別 TUFSS-SV 参加者数



「ショートビジット留学体験報告書」のうち、「参加したプログラムの授業内容と感想」の項目において、「総合評価を星の数で記入してください」の設問があり、学生は5段階で評価を行う。また、「今後1学期から1年の長期の留学をしたいか」という設問もあり、ここでこの二つの設問の回答に相関があるかどうかを見ていく。

6. 調査結果

「参加したプログラムの授業内容と感想」の回答については、全体の平均点は4.0と高い。以下、各大学別の参加したプログラムに対する評価を示す。

表1 TUFSS-SV プログラム実施大学別 参加したプログラムに対する評価（5段階の平均）

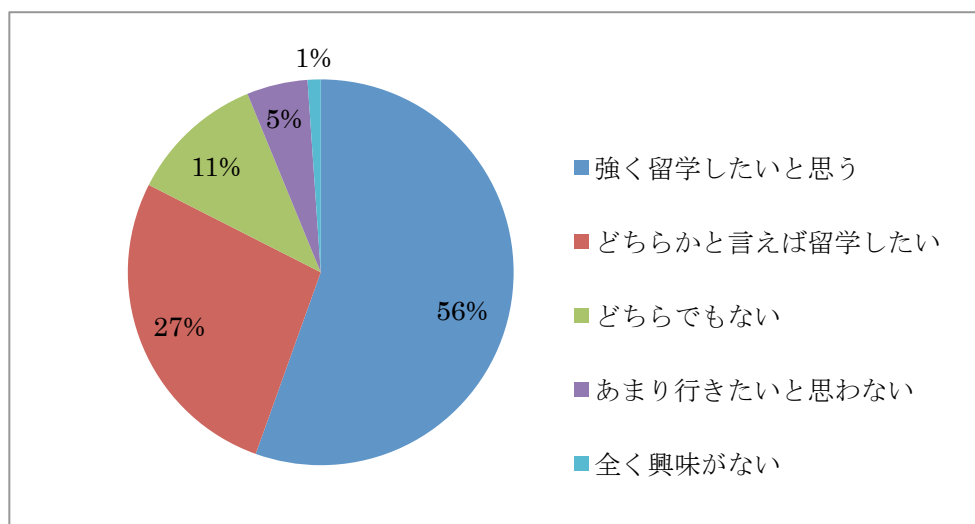
大学名	国・地域名	総合評価	回答数
ゲッチンゲン大学	ドイツ	5	2
ヤギェロン大学	ポーランド	5	2
北京大学	中国	5	2
ソウル大学校	韓国	4.7	7
ジュネーヴ大学	スイス	4.6	5
延世大学	韓国	4.6	5
コロンビア大学	米国	4.6	12
マンチェスター大学	英国	4.5	6

モスクワ大学及びサンクトペテルブルグ大学	ロシア	4.5	8
モンゴル国立大学	モンゴル	4.5	4
ハノイ国家大学・人文社会科学大学・ ホーチミン国家大学・人文社会科大学	ベトナム	4.4	14
グルノーブル大学	フランス	4.3	6
コインブラ大学	ポルトガル	4.3	3
トリノ大学	イタリア	4.3	3
ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院	英国	4.3	12
イスラーム自由大学シーラーズ分校	イラン	4.3	8
ブルネイ・ダルサラーム大学	ブルネイ	4.2	9
ウィーン大学	オーストリア	4.2	6
オークランド大学	ニュージーランド	4.1	9
アイルランド国立大学ヨーク校	アイルランド	4.1	21
カリフォルニア大学サンディエゴ校	米国	4.1	14
レジャイナ大学	カナダ	4.1	14
ブリティッシュ・コロンビア大学	カナダ	4.0	21
エアフィット大学	コロンビア	4	2
ギーセン大学	ドイツ	4	1
サンディエゴ州立大学	米国	4	6
シロンスク大学	ポーランド	4	3
プラハ・カレル大学	チェコ	4	5
ミュンヘン大学	ドイツ	4	8
モスクワ国際関係大学	ロシア	4	1
開南大学	台湾	4	2
極東連邦大学	ロシア	4	1
上海外国語大学	中国	4	3
北京語言大学	中国	4	3
アリー・バーバー・インターナショナル・センター	ヨルダン	3.7	3
エセックス大学	英国	3.7	3
サラマンカ大学	スペイン	3.7	3
エクス・マルセイユ大学	フランス	3.5	4
香港中文大学	香港	3.5	2

グアナフアト大学	メキシコ	3.3	6
ヤンゴン大学	ミャンマー	3.2	10
アルカラ大学	スペイン	3	1
ガジャマダ大学	インドネシア	3	2
リーズ大学	英国	3	1
聖公会大学校	韓国	3	5
淡江大学	台湾	3	2
カイロ大学	エジプト	2.8	4
平均		4.0	5.8

「今後1学期から1年の長期の留学をしたいか」という設問に対し、「強く留学したいと思う」「どちらかといえば留学したい」「どちらでもない」「あまり行きたいと思わない」「まったく行きたいと思わない」の5段階で評価を行った学生の回答結果は以下のとおり。

図4「今後長期の留学をしたいか」の設問に対する回答



上記の結果から、留学を希望する者（「強く留学したいと思う」「どちらかといえば留学したい」と回答した学生）は全体の83%とかなり多い。

ここで、参加したプログラムに対する評価と長期留学希望の関連について相関があるかどうか見ていく。参加したプログラムに対する評価および長期留学希望の度合いの偏差積和は、5.202であり、一組分の偏差積和を計算すると、0.110となる。プロ

グラムに対する評価の標準偏差は 0.555、長期留学希望の度合の標準偏差は 0.640 であり、ここから相関係数を求めると以下のとおりとなる。

$$0.110/0.555 \times 0.640 = 0.110/0.355 = 0.309$$

相関係数の評価基準によると、弱い相関があると考えられる。

本調査から、TUFSS-SV 留学先プログラムの内容に対する評価と、短期留学後の長期留学希望との間には、弱い相関があることがわかった。つまり、「留学先のプログラムの内容に満足しているか」、「満足していないか」という評価は、それほどその後の長期留学に関係がないともいえるだろう。

それでは、短期留学の経験のうち、どのような要素がその後の長期留学にどのようなインパクトがあるのだろうか。本学のショートビジット体験報告書の自由記述を見ると、以下のような意見が見られた。

長期留学への希望についての設問に対し、「あまり行きたいと思わない」「まったく興味がない」と回答した学生について、体調不良になった経験について記述のあった学生が複数名存在した。「現地の環境が体に合わなかった」という経験が、その後の長期留学を阻む一つの原因になっている可能性がある。以下は、長期留学への希望がない学生が実際に報告書に記述した内容である（原文どおり）。

- ・文化や衛生面が悪い環境に適応することに必死で、語学の勉強に集中できなかった。
- ・調子を崩すことが多かったこと。

また、語学力不足や現地でのトラブルについての記述も見られた。

- ・やはり語学力不足により、思ったようにコミュニケーションがとれないもどかしさ
- ・観光地でぼったくられそうになる
- ・バス内でバスの行き先(今どこにいるか)が聞き取れず、何度も乗り過ごした。

しかし、長期留学への希望がない学生においても、以下のような肯定的な意見が大多数を占めている。

- ・うまくいかないこともたくさんありましたが、旅行などをして楽しむことで気分が晴れました。現地で学ぶというのは大事だなと思いました。
- ・行きたいと思ったら、どんどん行くべき！
- ・事前に準備をしっかりとっておけば、大変充実した時間を過ごせると思います。
- ・日本との違いを感じるためにも、外国に行くということは必要だと思います。アイルランドは治安もよく、学習するにはとても良い環境でした。

7. 終わりに

本論文で対象とした留学学生は、行先も様々であり、期間についても15日から31日の学生が大半を占めているとはいえ、ばらつきがある。多様な学生の報告から一つの結論を導くことは難しい。また、留学経験は、受講したプログラムだけではなく、現地で経験するトラブルや友人との関わり、見るもの、聞くものすべてによって構成される。長期留学との相関についても、一つの要素を取り出した結果だけでは十分とは言えないであろう。

しかし、プログラムに対する評価と短期留学後の長期留学との相関が弱いという結論をきっかけに、そのほかの要素、例えば留学期間、留学先国、現地学生との交流等と長期留学希望との相関を見ていくことも、長期留学学生を増やすプログラム内容作成の一助となるのではないか。同内容の調査を重ねることにより、プログラムの質の保証、質を高めるためのヒントが得られるのではないかと考えられる。

TUFS-SV を事例として行った本調査では、プログラムについての評価の平均が5段階中4と高いことについては、プログラムの質保証がある程度保たれている結果ではないかと考えられよう。「プログラムの質の保証をどのように行っていくか」、という点は、同様のプログラムを持つどの教育機関も留学プログラムを実施する際の重要な命題であろう。

今後も引き続き本調査で使ったような「留学体験報告書」をほぼ全学生に記入させること、またその結果を詳細まで分析、周知することも、質保証につながると考える。

参考文献

横田雅弘(2015)「グローバル人材育成と留学の長期的なインパクトに関する調査」

<http://recsie.or.jp/wp-content/uploads/2016/04/summary-report20151230.pdf> (2017年3月8日閲覧)

池田庸子(2011)「海外留学の意義とメリットを考える—海外留学によって何が得られるか—」『留学交流(ウェブマガジン)』2011年7月号. Vol.22

http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/_icsFiles/afielddfile/2015/11/19/yokoikeda.pdf (2017年3月8日閲覧)

野水勉、新田功 (2014)「海外留学することの意義—平成23, 24年度留学生交流支援制度(短期派遣・ショートビジット)追加アンケート調査分析結果から—」『留学交流(ウェブマガジン)』2014年7月号. Vol.40.

http://www.jasso.go.jp/ryugaku/tantosha/study_a/short_term_h/_icsFiles/afielddfile/2016/01/06/201407nomizunitta.pdf (2017年3月8日閲覧)

東京外国語大学(2016) 留学案内2016:6-7